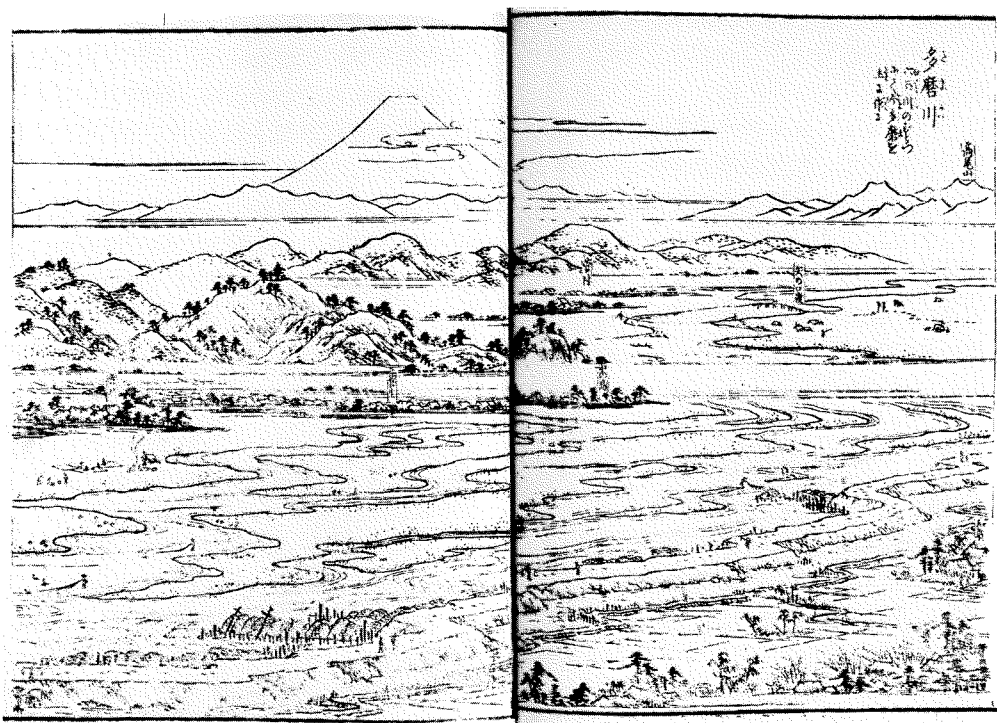


あるむぜお

府中市郷土の森だより

No.17

al museo



武蔵野の風景 2 『江戸名所図会』より 多摩川

広大な武蔵野台地が、いくつかの段丘崖を下りて南につきるところ、西から東へ向う多摩川の流れに出くわします。対岸には多摩丘陵が続き、古くは「多摩の横山」と呼ばれていました。

このような武蔵野南部の地形は、長い間に多摩川が作りあげてきたものです。ハケと呼んでいる段丘崖は、多摩川の流れが数万年の間に残した痕跡です。今、ローム層の下には当時の砂や礫の層が堆積しています。

しかし、近代以降の多摩川では大量の砂利が産業用に持ち去られました。堰が各所に作られ、

水量が減り、玉石は流され、上流からは流れてきませんでした。1983年2月、府中市是政の河原では、ついに砂利の下から約100万年前の砂層が現われ、そこに大量の貝の化石が含まれているのが見つかりました。

多摩川は、これらの貝が埋もれて再び日の目を見るまでの100万年の歴史を演出してきたのです。しかもこの貝化石は、当時の自然環境の重要な事実を物語っています。このことについては、11月からの展示会「貝化石と貝の仲間」展で探ってみる予定です。 (〇)

第2回 収蔵品展

9月8日(日)～10月13日(日)

当館では、この3年ほどの間に収集した資料の一部を紹介する収蔵品展を開催しています。市民の皆様から寄贈いただいた生活や生業の民具が中心ですが、ここでは展示資料のなかから、府中ゆかりの川崎平右衛門に関係した文書を紹介いたします。

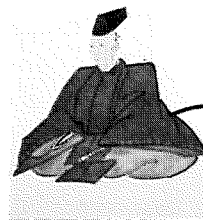
川崎平右衛門定孝は、元禄7(1694)年に武蔵国多摩郡押立村(現府中市押立町)に生まれました。川崎家は代々、押立村の名主を勤めた家柄です。

平右衛門が活躍した江戸時代の中頃は、政治都市・江戸の人口が、都市商業の発展によりますます増え続け、一大消費都市が形成された時期でもあります。こうしたなかで、8代将軍吉宗は財政再建をはかることとなります。吉宗の享保の改革は、法の整備と機構改革、物価の安定など多方面にわたるものでしたが、大きな特色に、有能な人材を登用し、新田開発を積極的に行なったことがあります。この一人が平右衛門で、享保年間(1716～1736)82か村の武蔵野新田が開発されています。

さて元文3(1738)年・4年に、この新田村々を大凶作が襲います。平右衛門の事績を知る手掛かりとして『高翁家録』がありますが、同

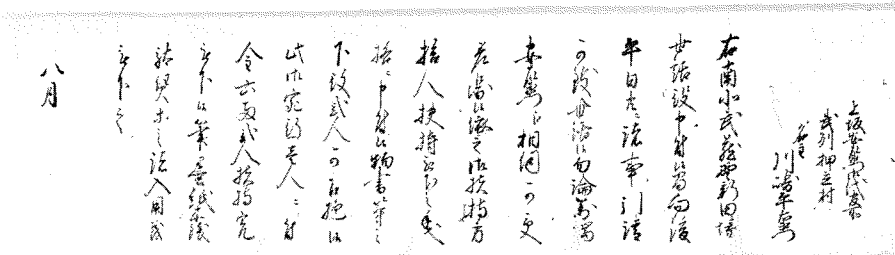
年八月八日「大岡越前守申渡書」とみえますから、関東地方支配でもあった町奉行大岡越前守忠相が、上坂安左衛門代官所支配の押立村名主平右衛門に世話役を命じているのがわかります。平右衛門は十人扶持、手代格を仰せつかり、協力者としての下役二人を召し抱えることも許されています。

新田場世話役としての平右衛門は、凶作で新田を出ていった農民に、立婦料3両を与えて呼び戻し、夫食や穀物の種子を貸与したり、また用水等の土木事業の起工による労働力の投入を行ったりして、生活の安定をはかっています。そのほか井戸を掘削して飲料水を確保し、貯穀を奨励するなどの施策を行い、新田村の育成をはかっています。



▲川崎平右衛門像 (川崎昌美氏蔵)

その後平右衛門は、本田代官(現岐阜県穂積町)となり、輪中地帯の治水にその力量をふるい、次に石見銀山(現島根県大田市)を再興するなど各地に事績を残し、明和4(1767)年6月6日、江戸にて病没しています。(G)



▲大岡越前守申渡書(写) (川崎正利氏寄贈)

書には「夫食差支」「人馬共夥敷渴死」「百姓離散」「新田退転」と記載され、当時の窮状を窺い知ることができます。こうしたなかで元文4(1739)年8月、平右衛門は南北武蔵野新田場世話役を命じられるのです。この申渡書が写真の文書です。この文書の端裏書には「元文四末

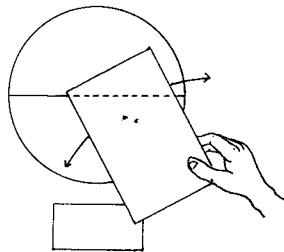
次回予告
企画展 貝化石と貝の仲間
11月17日(日)～12月15日(日)

太陽面スケッチのとり方

太陽面観測の準備ができたところで、今回は観測記録のとり方の説明です。

まず、投影板にスケッチ用紙をクリップで留め、太陽像をスケッチ用紙の円に合わせます。さらに、太陽の方向を合わせるために、黒点をスケッチ用紙の東西の線にのせて、赤道儀にモータードライブが付いている場合は、駆動を止めて黒点が東西線上を動くようにスケッチ用紙を合わせます。太陽面の方向は投影法では、上を北にすると右が西になります。

準備ができたら、素早く黒点の「暗部」「半暗部」の形を写しとります。この時、左図のように、用意した白紙を太陽面上でゆすりながら見ると、すぐには目には見えにくい黒点なども見え



てきます。

位置の記入が終わったところで時刻を記入しておきます。これは太陽の自転のために時刻によって経度を補正するためです。地球に対して太陽は、一時間に約1°自転するので、より細かいデータが必要になってきた場合のために、困らないように記録しておきましょう。

次に黒点の数を数えます。右の表のように、暗部一つにつき一個として計算します。この時にも、白い紙をゆすりながら確認するとより正確になります。数えた黒点数は、主黒点のまわりとその側にある黒点とでつくる「黒点群」ごとに、記録するとよいでしょう。

黒点数を数え終わったら黒点の詳細なスケッチをしましょう。この際に、重ねて描くと鉛筆と黒点の区別がしにくくなるため、上下に少し

ずらし、白い紙でゆすりながら比べると正確に描くことができます。この時、「白斑」も記入します。

さらに、観測時の見え具合「シーイング」も記録します。最もよいときを5、最も悪いときを1とし、5段階に分けます。シーイングが良いときには、太陽面にある「粒状斑」などの細かい模様もはっきりと見えます。逆に悪いときには、細かい模様の判別はできず、太陽の縁がゆらゆらして見えます。

・	暗部だけ1個	黒点数 (半暗部は数えない) 1個
・	半暗部の中に暗部が1個	
・・	・	2個
・・	・・	
・・	・	3個
・・	・	
・・・	・	4個
・・・	・	
・・・	・	7個
・・・	・	
・・・	・	10個
・・・	・	

黒点数の数え方

最初はスケッチに時間がかかると思いますが、しばらくすると慣れて時間も短縮できるでしょう。太陽観測は、太陽が見える限り欠かさず毎日観測することが大切です。

次回は、観測記録整理の仕方についてです。

(Ho)

貝化石と府中の自然環境

松田 隆夫

1

これまで府中市域では、いくつかの場所で化石が発見されています。府中市若松町（浅間山）、是政（多摩川河床）、清水が丘、南町、新町（市立府中第五中学校）などが主な発見地点です。

いずれも貝化石が主なもので、当時（約100万年前、第四紀更新世）の海底に住んでいた貝の仲間です。こうしたことから、今では陸地になっている府中にもかつて「海の時代」があったことがわかります。

では、どのような海だったのか、それぞれの場所で発見された貝化石を調べていくうちに、当時の海の時代の環境がわかってきます。また、化石が含まれている地層の様子を調べることができるのです。

2

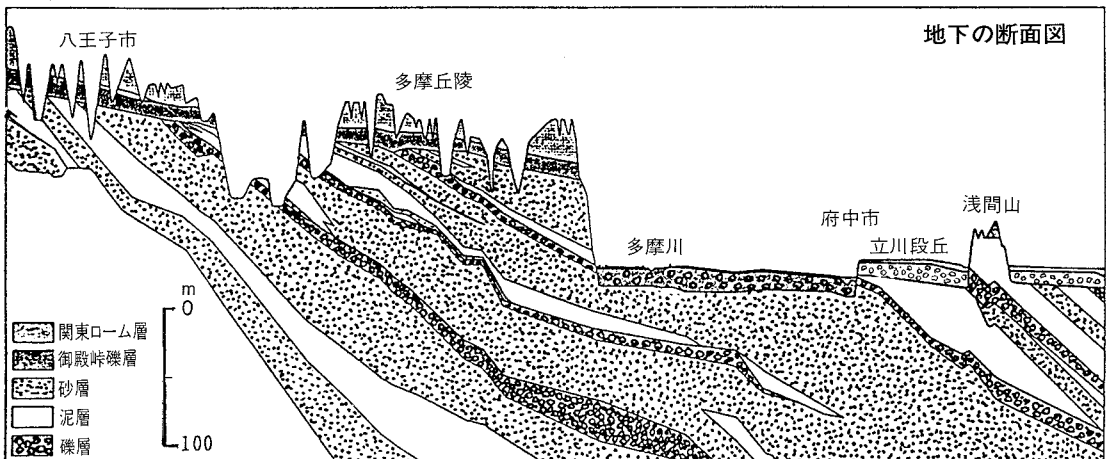
府中市是政の多摩川河床では52種類以上の貝化石が発見されています。最初に見つけたのは矢崎小学校の6年生(当時)で、場所は多摩川の南武線鉄橋の上・下流です。ここでは玉石などの砂利が一部流失し、海底に積った砂層が見えていました。この砂層の中に貝化石が多く含まれ、とくに二枚貝のエゾマテガイが密集していたのです。ナミガイやマルヒナガイ、トウキョ

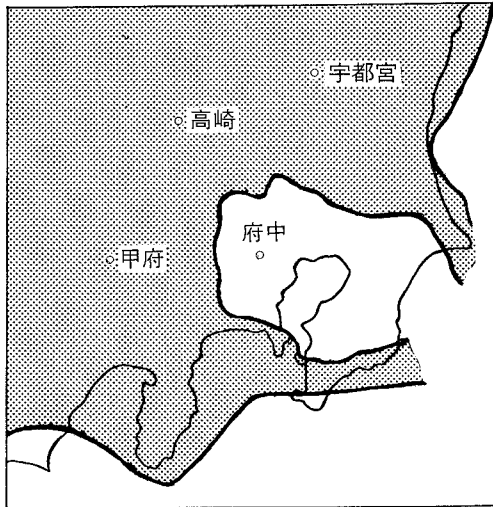


化石の採集

ウホタテガイ、タイラギなどの二枚貝、キサゴやエゾキリガイダマシの巻貝も見つけられました。こうした貝化石から推定される当時の環境は広い内湾の中でも、水深30m以内の浅い海であったと思われます。

是政の貝化石を含む地層は、多摩川対岸に見える多摩丘陵の崖でも観察することができます。是政から大丸の堰を経て、大栗川の合流点付近では砂層から泥層に変わっています。この泥層は南町の都営住宅建設工事の際に見られ、第三小学校で保管されていた泥層のブロックの中にはホトギスガイなど小型の二枚貝が含まれていました。また、顕微鏡で観察すると微小な化石である藻の化石（珪藻化石）や有孔虫化石が





約100万年前の陸の形 (アミ部分)

あり、貝化石と微化石から淡水（河川水）と海水が混じるような河口（汽水域）や波打ち際（潮間帯）に住んでいたと思われます。

南町と是政の化石を比較すると、同じ地層に含まれている化石から、是政から南町にかけて海の水深がだんだん浅くなり、陸地に近づいていたことがわかります。

貝化石を含む地層については、多摩丘陵の地下地質では礫—泥—砂のサイクルが見られ、府中市が位置する多摩川低地の地下では砂勝ちの地層に変化しています。さらに、武蔵野台地の地下では、砂勝ちな地層の上に礫や砂をはさむ泥勝ちな地層が積っています。府中市若松町（浅間山）や清水が丘、新町などの化石は、この泥層に含まれています。

3

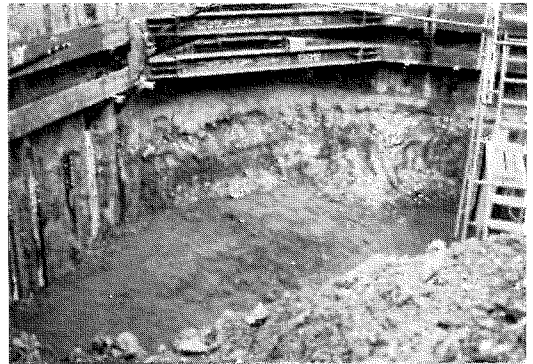
次に府中市清水が丘では、下水道工事の際に二枚貝であるマガキが密集した貝層が発見されました。工事がシールド工法のため、直接観察することができませんでしたが、掘りあげられてきた泥（粘土）の中には多くのマガキが含まれ、また二枚貝であるウネナシトマヤガイも少量含まれていました。

このようなマガキの貝層は、昨年の12月に新町・第五中学校の体育館建設工事の際にも、泥（粘土）層から発見されています。ただし、清水が丘のマガキが10cm前後であるのに対して、

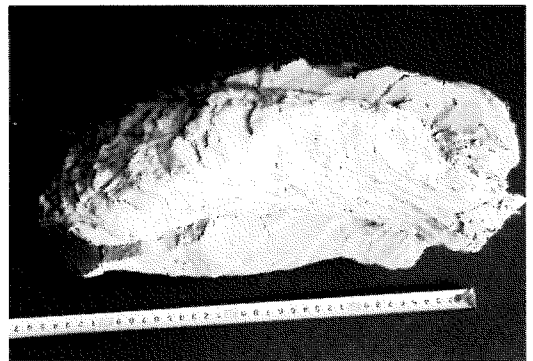
新町のマガキは30cm前後であり、最大40cmを越えてナガガキと呼ばれるものです。ナガガキは東北や北海道の泥勝ちの場所に住んでいるといわれています。マガキのほかにはウネナシトマヤガイ、ホトトギスガイ、ウソシジミガイ、フレユキミノガイなどの二枚貝がみられ、どの貝化石も殻の合わさった（合併）ものです。

ウネナシトマヤガイは、かつて隅田川の河口に住んでいたといわれます。また、清水が丘や新町では、いずれもマガキの貝層が形成されています。つまり当時の清水が丘や新町は、淡水（河川水）と海水が混じるような内湾奥部の汽水域のような環境であったと思われます。

新町のマガキの貝層は、地表下10m付近で見られ、さらに15mまで掘り下げた所では樹木の株化石が発見されています。



マガキの貝層（府中市新町）



ナガガキ（府中市新町）

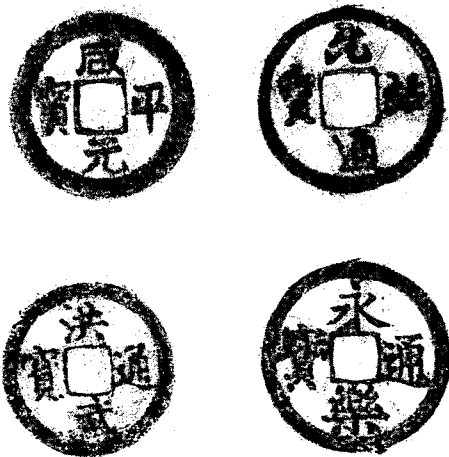
企画展「貝化石と貝の仲間」では、府中市周辺で発見された貝化石を中心に、多摩川流域の化石や貝の仲間、さらに人々の生活にかかわる貝塚なども紹介します。

＝最近の発掘調査から＝

現代では、お金は銀行に預けておけば利子もつきませんが、今から500年程前の中世の時代には、地面の下に穴を掘って蓄えていました。一般にお金（当時のお金は、銅銭でした）、が一か所にまとめて埋められたものは、「備蓄銭」と呼ばれています。こうした備蓄銭は、これまで全国各地から見つっていますが、先日市内でも約3900枚もの備蓄銭が見つかりました。

備蓄銭が見つかったのは、大国魂神社の北西、甲州街道「寿町交差点」南側約100mの府中街道東側のところです。この調査地区では、ほかにも中世の地下式横穴など多くの遺構が確認されています。地下式横穴の一つからは室町時代の終わり頃のものと思われる中国で作られた青磁の皿が10枚まとめて見つかりました。

銅銭は、長いところが約80cm、短いところが約45cm、深さが約52cmの楕円形の穴の、奥へ突っ込まれるような形で埋められていました。このように銅銭が大量に見つかる場合は、甕や壺などの容器に入れられていることが多いのですが、ここでは容器は確認されなかったため、おそらく袋や箱のようなものに入れて埋められていたものと考えられます。また、銅銭の孔に麻紐を通して棒のような束にして使われていたものが、そのまま並べて入れられていました。ちなみに、この棒状につなげたものを「繕」と呼



出土した銅銭(拓本)

んでいますが、ここでは、ばらつきはありますが、一繕約97枚となっています。

また、銅銭の種類はいずれも渡来銭で、これまでわかっているものでは、唐の開元通宝（初鑄年621年—以下（ ）内の年代はいずれも初鑄年です）を初めとして北宋の咸平元宝（998～1003年）・祥符通宝（1008年）・天聖元宝（1023年）・皇宋通宝（1039年）・熙寧元宝（1068年）・元祐通宝（1093年）・政和通宝（1111年）、明の洪武通宝（1368年）・永楽通宝（1411年）などがあります。これらのことから、備蓄銭が埋蔵された時期は、おそらく15世紀後半から16世紀初頭頃と思われる。なぜこのように大量の銅銭が埋められていたかと言いますと、おそらく長く続く戦が起こった時、武器などを調達するために蓄えておいたものと考えられます。

このような備蓄銭は、府中市近辺では調布市や八王子市多摩ニュータウンで確認されています。室町時代の終わり頃と言えば、戦いに明け暮れる世の中で、戦に対する備えは必須の仕事だったに違いありません。そうした意味でも、今回紹介した備蓄銭によって、当時の武士達の生活の一端を窺い知ることができます。

（宮西町・仮称府中TSAビル地区の調査から 江口）



カメラアングル

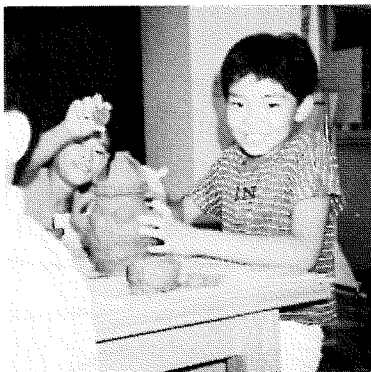
— 夏休みの体験学習から —



▲夏は草とり！ 6月の田植え以来、稲はどんどん成長しますが、雑草も負けてはいません。ついでにカエルやトンボもつかまえました。



▲今どきのワラ細工 かやぶき 茅葺農家の庭先にムシロをしいて、親子そろってワラ草履ぞうりを作るなんて、オツなものです。



▲日本人の原点を求めて？ 4000年前の縄文人は何を考えてこんな形を作ったのだろう。暑い中、畑で土器を焼きました。

あれこれ

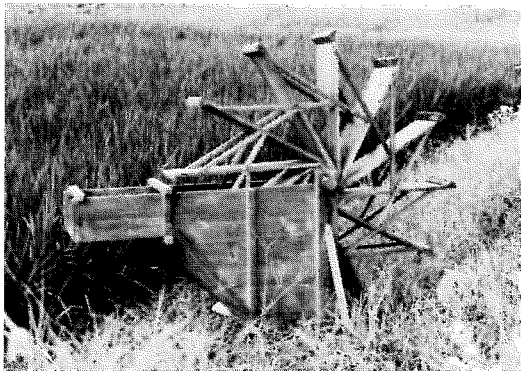
踏み車

6月の田植えから秋のお彼岸の頃までは、田んぼには水がはられ、稲が大きく成長します。稲は成長するにつれて根を張り、葉の数を増やしていきます。そして茎の根元から、つぎつぎに新しい茎が生まれてきます。このように株分かれ（分けつ）をくりかえしながら成長し、穂がでて花が開き、実となるのです。

この梅雨から夏にかけての時期は、「番水」という言葉が示すように田んぼの水の管理と、田の草とり（除草）が主な仕事となります。水の管理は、中干しをすることもあります、絶え



水と揚る向
おん車え



ず田んぼに水をはっておく重要な仕事です。

さて踏み車は、用水が田んぼより低い場合に使われる用具です。ジャバラと呼ばれることが多いのですが、府中ではスイシャとも呼ばれます。穀物を搗いたり、挽いたりする水車とは全くちがうものです。写真の踏み車は「紀元二千六百年」「昭和十五年七月七日造」と刻書がみられる自家製のもので、車返（くまがし）（現府中市白糸台）で使用されていたものです。

この踏み車のことは、江戸時代の農書『農具便利論』（大蔵永常著）に「(右)ふみ車にて水を揚る図」と、絵入りで紹介されています。

間もなく実りの秋、農家にとっては、また忙しい時節となります。(G)

インフォメーション

自然に親しむ秋の講座から

内容・参加方法はお問い合わせください。

■自然講座

10月4日(金)～11月8日(金)の毎週金曜日と11月10日(日)「博物館で学ぶ生物学」

■自然講習会・観察会

10月20日(日) 14:00～「鉱物の世界」
10月27日(日) 10:00～「野ギクを追って」
10月27日(日) 14:00～「武蔵野台地の生いたちと火山灰」

■星空観測会

10月19日(土) 18:30～「月、土星、夏から秋の星」
11月16日(土) 18:30～「月、土星、秋の星たち」

あるむぜお 第17号

al museo イタリア語

“博物館で” “博物館にて” の意

発行日 1991年9月30日

発行 府中市郷土の森

〒183 東京都府中市南町6-32

☎0423-68-7921